

第17回安佐動物公園・植物公園・こんちゅう館研究活動発表会

発表要旨

(1) 国内最大の『オーストラリアバオバブ』の開花について

発表者：広島市植物公園 栽培・展示課 技師 堀川大輔

2017年10月、広島市植物公園の大温室のリニューアルに伴い、新たにシンボルツリーとして国内最大のオーストラリアバオバブ (*Adansonia gregorii*: アダンソニア・グレゴリー) を導入しました。翌年2018年3月から葉が展開し始め、高温期の夏には旺盛な生育を示しました。

2019年8月25日の夜、導入後初めての開花を確認しました。これは三重県の(株)赤塚植物園に次いで国内2例目の開花となります。白い花で、顔を近づけるとほのかに甘い香りがしました。同年は9月中旬までに計6輪開花し、2日ほど白色の状態を保ちました。

翌2020年は8月17日に最初の花を確認し、9月下旬までに計14輪開花しました。9月上旬に催された夜間開園では、開園時間中に多くの入園者の方々に開花の様子を見てもらうことができました。

さらに、2021年は緊急事態宣言による臨時閉園中に、過去2年をはるかに上回る45輪が8月下旬～9月下旬に開花しました。

3年間の開花の観察を経て、何月頃開花するのか、何時頃に開花し始めるのか、開花を観察するための工夫等について、貴重な知見を得ることができました。このことにより、開花期やおよその開花時期を予測することが可能となりました。

今回は、2019年、2020年、2021年のそれぞれの年でどのように生育し、開花にいったか等を、開花の映像を交えてご紹介します。



導入後初めて開花した花 (2019年8月26日)



枝葉の成長の様子 (2021年9月16日)

(2) 立てなかった赤ちゃんキリン『はぐみ』の治療と現在の様子について

発表者：広島市安佐動物公園 飼育・展示課 技師 堂面 志帆

2020年4月9日、安佐動物公園で1頭の雌のキリンが誕生しました。『はぐみ』と名づけられたそのキリンは、生まれたときから両方の後肢に「屈腱弛緩（くっけんしかん）」という異常が認められ、正常な状態で立つことができませんでした。産まれたその日に両方の後肢にギプスを巻いて固定したことで、数日後には自力での歩行や、母親からの授乳が可能になりました。しかし、ギプスによる固定は骨や筋肉の成長を妨げるだけでなく、ギプス固定のために行う全身麻酔の危険性の高さも問題でした。そこで、ギプスの代わりに後肢を固定することができる「装具」（補助具的な器具）の開発を、広島国際大学の協力の下で開始しました。装具は3度にわたり改良し、装着した状態で歩行を繰り返すことで骨の成長に伴い筋肉や腱も発達し、同年11月には両後肢とも装具を使用せずに歩行できるようになりました。

今回は、産まれた時から両方の後肢の屈腱弛緩により正常に立つことすらできなかった個体が、ギプス固定や装具装着による治療を経て完治した経緯と、装具をはずして1年以上経過した最近の様子についてお話しします。



今回治療した個体



装具が装着されたようす

(3) 『タガメ幼虫の屋外多頭飼育』について

発表者：広島市森林公園こんちゅう館 主任技師 松尾 信彦

タガメは日本最大の水生昆虫で、高い人気があります。こんちゅう館では、飼育個体の繁殖と業者からの購入を繰り返して展示を維持してきました。

ところが、本種が第二種国内希少野生動植物種に指定されることにより、業者からの購入は出来なくなりました。購入に頼らず着実な飼育・繁殖技術を確立する必要があります。

こんちゅう館における従来の飼育成績は、タガメは1卵塊（約80卵）から50～60頭程度の幼虫が孵化するものの、羽化個体は5～7頭程度にとどまりました。ところが、飼育方法を変更したところ2020年には1卵塊から25頭前後の成虫を羽化させることができました。

主な変更点は、これまで幼虫期の後半を室内で単独（1匹ずつ）飼育していた幼虫の大部分を、屋外での多頭飼育に切り替えたことです。従来、幼虫期の後半を単独飼育していた理由は共食いを恐れたからなのですが、飼育に手間がかかる割には羽化する成虫が少なめでした。そこで2020年は試しに野外に設置した大きなケースに水草を多目に入れ、餌を十分与えた上でタガメ幼虫を多頭飼育したところ、前述のとおり従来を大きく上回る羽化数となりました。

今回は、これらの詳細と問題点について紹介します。



タガメ：卵塊



タガメ：孵化



タガメ：成虫